

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 143号

平成26年3月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三先生の文章より (5)

(「石館守三先生金曜会語録」より (1))

(石館守三先生は、昭和21年2月から昭和59年4月まで38年間、東京大学キリスト教学生のための寮「同志会」の理事長を勤められた。毎月、同志会の金曜会に出席し寮生を指導された。その発言録が、同志会の100年史編纂の事業として、OBの村上瀏治氏の編纂により「石館守三先生金曜会語録」として残されている。同志会と石館基氏のご了解のもとに、「石館守三先生金曜会語録」より抜粋を紹介させて頂く。なお、それぞれの文章の見出しは山口がつけたものである。また、旧仮名づかいは新仮名づかいに直した。))

Ambition

若い時に何を考えたかを思い起こす。と共に与えられた仕事という事につき考える。Ambition [大志] ! 若い時は人は誰しも純粋に人生を、生き方を考える。スタートに於ける純粋性、偉大なる生活は、最初の純粋なる Ambition によって決定される。——特にクリスチャンに於ては。

キリスト者にあつては、世の一木一草といえどもすべて神の支配のもとにある。我らは自然の災厄等にあつた時に始めて神の事業を

認識するが。我々はとかく神の支配を忘れ運命などというものを考える。これ信仰の足らぬところである。世界に於ける偉大なる事業は如何にしてなされたかを思え。これらの仕事は最初からある特定の人功利的な意図を以てなされたのではない。リンカーン然り、リビングストン然り。

これらの事業は平凡な祈りと duty としての仕事によりなされたのである。諸君はこれから色々Ambition をもたれるであろう。が然し大きなそれより、真実なそれを選ぶように努めてもらいたい。職業は天秤にかけてはかれるものではない。全てを擲^{なげう}ってもそれに心身を傾けうるようなある一つの真実な職業を選べ。神のささやかなる声に耳を傾けよ。神の与え給うつとめを真剣に果すものは幸福である。世俗的な功利に支配された仕事は花瓶の花のごとくしぼんでしまうものであるが、神より与えられた使命は永久に花咲くものなるを銘記されん事を切に希う。

(昭和 25 年 6 月 16 日 金曜会)

我がくびきは易く、我が荷は軽ければなり

キリスト教が日本に伝わってから色々な波があった。又キリスト教が異教と類似しているように思われる節があるかもしれない。然し聖書を読む時いつも新しい力を感じる。キリスト教は真の道だ。間違いがあるとすれば我々の個別の罪によるのだ。キリスト教は革命的力がひそまれている。希望は此処にひそむことを憶えよ。

我々の野心としては聖書の伝える所を実行する事が最上のものである。これに優る野心があろうか。「我がくびきは易く、我が荷は軽ければなり」(マタイ伝 11 章 30 節) を記憶せよ。我々の計画、野心——それが神の意思に反するものなら絶対に我々は破れ去る。疑わず神の道を歩め。幸福か否かの判断は神にあり又自己の良心にある。

(昭和 32 年 1 月 18 日 金曜会)

同志会の記憶

同志会に具体的目的はない。報いも望んでいない。ただ創設者が祈って建てた。日本の指導者を。神の経緯の一端でもと。55年間ありがたくも続いて参った。入会するのはかりそめに入る。ゆくりなくも入る。しかしそれは人生の大事件として残るであろう。私もあり。この頃は入試が難しい。キリスト教に縁のある人はなかなか東大に入れない。大部分キリスト教は初めてというひとが同志会に来る。さびしい。しかし私もその一人であった。日曜学校へ行った程度だ。高校で教会へ一二度行った。父は陰で喜んでいただけで何も云わない。私は一生を何に捧げるべきか。思想全集など読んだ。しかし知的 Vanity [虚栄心] に過ぎなかった。卒業の頃ルナンの「キリストの一生」を読んだ。「偉人」の夢と全く違った「人の子」。これならまねができそうだ。仙台の下宿の2階でそう考えた記憶。

おぼろげながら東大へ来た。友が同志会にいた。古我源吉君なり。「知らなくても大丈夫だ」という。入った当座はチンプンカンプン、朝拝は苦痛だった。半年経つと人まねながら出来るようになった。小西先生は3年生で信仰に燃えていた。その他色々トウトウと哲学を語るなど。2年生の終にキリストに身をゆだねる外に選ぶべき道な

しと思い白山教会で受洗。あとは友情に支えられて卒業した。3年生の薬学は忙しい。しかし訓練は甘く教会に出たり入ったり。しかし妻子をもち人生を経ると同志会の記憶が郷愁に似て時々慰め。ふるさと。キリストにある友の愛。安心のみ。他に一生を捧げる価値あるものなし。今日いささかお世話をしているのも感謝から。諸先輩の支持もそれである。何の報酬もないが。

目に見えるものに努力するのは消えてしまう。日曜、朝晩の時間を犠牲にして世の賢い人が見ればマイナスだろう。何の求める所もなく目に見えぬ者のためになせ。それが人を決定づける。そういうことを同志会を通じて学んだ。

諸君は偶然ここに入った。目に見えない宝を得て私と同じ感謝をすることが出来るように。よき訓練の場所である。色々の専門の者が渾然一体。得難い経験。自己反省の機会である。入ったのは摂理だ。……設立の趣旨は上の如し。一人前になるためには友人先輩知らざる人の祈りと好意がある。それだけでも味わえ。一人で東大に入り一人で野心を実行するのではない。そのような好意あればこそ神が忍耐して人をまだ支えていたまうのである。人生の目的をおぼろげながらもここでつかめ。(昭和32年4月19日 金曜会(署名式))

天職 (Beruf、profession)

T君の話に呼びだされた話。確かに現世的にはマイナスの面が多い。それは否定できない。我々は職業についてもその人の活動についても実際目に見える技及び仕事の能力は誰も争えない現実である。しかしその他に目に見れないもの、その確信が大切であり必要であり、それはクリスチャンの特技である。我々は滅びるものに仕えるのではなくて目に見えない何ものかを確認してそれに仕えねばならない。そこに神から与えられた任務という意味で“天職”という言葉が出てくる。Beruf、professionはその意味である。神の意志を我々の体を通して現実の社会に伝え実現するものでなくてはならないのである。だからなまじ損得の考えをもってヘッピー腰に事を構えればそれは中途半端なものとしてしかならないであろう。

この世の進歩というものが男の携わる科学のみでなされるものではない。その知識のみではだめである。ギリシア・ローマと現代と哲学上の問題は少しも進歩せず解決されていないではないか。人間には女性の持つ愛情、物を purify [浄化] するものがなければならない。人生に豊かさがなくなるのである。

ただ君たちも最高学府を出でただけでは真の意味の成功者ではな

い。もっと精神的なものをも備えなければならないのである。真実の願いは天職の使命を徹底させるものである。ライ病の治療を真実の願いとすればその道は必ず開ける。願いこそが我々に必要な factor の一つである。職業に関する夢と現実についてはその職業のもつ矛盾と願いとの間の違いを如何に解決するか大変な問題である。

(昭和 32 年 6 月 21 日 金曜会)

愛の人

学生は休みには浩然の気を養い大いに自然に親しむことは学生の特権である。或時こういうことを考えた。現実そのものが甚だ不思議である。地球も天体としてみれば極くちっぽけなものにすぎない。そこに生きている人間の不思議。我々がもっと考えなくてはならぬことは凡そ人間というものの憧れが重大な内容を持っているということである。人間の理想、聖書における説明、我々はおどろくべき神性をもっている。immortalな生命にあこがれているという問題、この理想を完全に示したのがイエスである。しかも我々がこれに共感を覚えるということ、これは重大なことである。

もう一つヨハネ第一書の愛、本当の愛は神によって下されたのである。文化は人間の集団にのみ存在する。Gemeinschaft〔共同社会〕からくる。お互いに愛を交換するところよりくる。同志会もそうである。その愛の誠なるを知り愛の価値を知り愛の人となろうとするのである。愛に生きることが最大の喜びであり神の喜ぶところである。我々はここでそれを学ぶのである。この夏休みにこの意味において何かを得てくるように。

(昭和 32 年 7 月 5 日 金曜日)

同志会の意義

7人の新しい兄弟を迎えて心から歓迎の意を表す。恒例により同志会のなりたち、その精神を説明する。同志会は58年の歴史をもつ。西片町では40年経つ。阪井徳太郎先生が基礎をきずかれた。アメリカの大学で学ばれた先生が将来の日本建国の指導となる東大の学生に永遠に滅びないキリスト教の精神を知ってもらいたいという使命感をもってきずかれたものである。同志会がここまで来たのは御心によるもの。…

300名弱の会員があり地の塩として多くの功績をなしてきた。しかしその功績のために同志会は立派なのでない。神のために生活を営んでいるということ、キリストによって兄弟の契りを結んだ生活をするところだということをおぼれるな。諸君はここで偶然に入ったのかもしれない。しかし私もそうであったようにここを通るコースは人生の方向を定める大事なコースである。同志会で、生きるためには何が重要かということをはっきり学んでほしい。本当にいいもの、本当に美しいものが何か。それは神、神の子イエスにあるということをおぼれここで教えられるだろう。同志会のよさを味わってほしい。

(昭和34年4月18日 金曜会一署名式)

エミール・ブルンナー先生からのメッセージ

欧州旅行は戦後3回目、全部で4回目である。その主たる目的はというと専門により招聘されたのだが、同時にその後のドイツの復興、精神復興について見たかった。(またチューリッヒでブルンナーにあった。) …

最後に Dr. E. ブルンナーからのメッセージを紹介します。今年75歳の誕生日を迎えられる。どうか日本の青年よ国民よ。どうか第1にキリストにある信仰にとどまれ。いかなることありとも信仰を失うな。第2には日本はキリスト教を知らない人が多い。それ故キリスト教の精神を多くの人に伝える必要あり。それには Layman [平信徒] が職を通してキリスト教の精神を伝える。第3に未信者の前ではむやみにキリストの名を口にしない。お祈りをしない。職域での実行を通してキリスト教的 Geist [精神] をにじみ出させる。自分の第2の Heimat [ふるさと] は日本である。こうブルンナー博士はおっしゃった。

(昭和34年9月18日 金曜日)